碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可
神奈川　碩心会　発行

5年11月　（256号）
発行者　萃岳愛
根岸編集者
中村岳愛

5年11月現在	会員数
逗子地区	161名
葉山地区	223名
大船地区	43名
（合計	427名）

◎行事予定

○堀内支部納会
日時・12月11日(土)午後6時30分より
場所・堀内会館

○平成6年碩心会初吟会
日時・平成6年1月9日(日)10時より
場所・京急ビーチセンター
会費・三千円
神駆・12月10日　企画部　綾部秋岳迄。
当番区・逗子B・桜山A・銀詠
葉月・山ノ根・沼間

※当日出席者は必ずネームプレート着用。

第一回神奈川地区大会に入賞

右会に於て20名一組(左記)による合吟コンクールに碩心会が二位入賞。来年3月27日の全国大会(ベイNKホール)に参加決定。

菊池早苗・森はるみ・星野輝子・小金美智子
服部きく・（以上　真澄）　加藤芳子・奥野敏子
川口喜美子・鈴木洋子・行谷経子・（以上　A・B色）
池田敏子・鈴木美佐子・岡本和江・守屋悦子
中村不二子・（以上　堀内E）　村井知子・中山俊江
森久美子・中村豊子・駒場咲子・（以上　逗子A）

真澄支部十五周年記念の集い

森　晴風

真澄支部が発足してはや十五周年を迎えることになりました。去る十月三日、日頃暖かく私達を見守って下さる根岸会長を始め、千葉、三井、綾部、松井の各先生方の御出席をいただき、十五周年記念の集いをささやか乍ら、大変楽しく、和気藹々のひとときを過すことができました事、支部の一員として嬉しく思います。

スタート時点は七名で始めましたが、現在は三十余名となり、　すばらしい先生と、素敵な吟友の方々との出あいで、ここまで続けられた事を感謝いたしております。

恥ずかしさと緊張は何年たっても越えられず、又先生の吟を会得する事ができなくて情ない限りですが、いつもお元気で、熱意のこもった村田先生の御指導をいただき、真澄支部一同「和合団結」のもと、二十周年に向って、健康で声の出る限り、吟道を続けたいと思います。今後共何卒よろしくお願い申し上げます。

詩情ゆたかな岩手路の旅

神奈川県本部吟行会

（第一日）　　杉山雪岳

参加者112名を乗せたやまびこ35号は、8時6分東京駅から一の関へ向って発車。家を出る時から気になっていたお天気…とうとう米沢あたりから、雨が窓硝子に散りはじめた。窓からみると、みちのくの晩秋に包まれた山が幾重にも重なり、藪孤山作の〝山中の月〟の詩を思い出していると、「虹よ」の声に進行方向を見ると薄い虹。これならお天気も大丈夫…。だが仙台あたりから又雨が降り出す。

10時47分一の関着。バスに乗りかえ、かっこう団子で有名だという巌美渓にて渓谷見物。この辺りは漆の木が多く、松の緑とのコントラストに、きれいの連発で景色に見とれる。

雨の中バスは快適に毛越寺へと走る。途中の街路樹ドウダンつつじ、真赤なもみじが実に美しい。お腹もすいた頃毛越寺に着き精進料理をいただき、奥州平泉の歴史の中に入る。平安様式をとりいれた朱塗りの本堂が、雨に濡れた赤松の緑と調和して美しい。又大泉が池を中心とした浄土庭園には荒磯の趣を表わしたという出島先端がとび島となり、私の足を止めた。折しも近くの鐘楼の鐘の音がゴーンとひびき、印象的な名勝の地でした。

松尾芭蕉が平泉を訪れ、世の移り変りを悲しみ「夏草や兵どもが夢の跡」と涙を流したという義経自刃の地といわれる高館の道を昔を偲びながら走り、平安美術の宝庫といわれる中尊寺へ。山門をくぐると左手に菊人形が目を楽しませてくれ、いよいよ皆金色の阿弥陀堂国宝金色堂です。須弥壇の中央に、三代の御遺体と泰衡公の首級が納められていると聞く。往時を偲び屋外へ出て、西行法師の「ききもせず…」の歌碑、芭蕉の「五月雨の…」の句碑の前を通り、両側に杉の老木茂る月見坂を下ったところには弁慶堂があり、又東物見台から古戦場を望むことができた。

そして次は宮沢賢治館へ。まだ刈取られない稲穂が田圃のあちこちに見え、サムサノナツのせいでしょうか。記念館に着き、雨が降りしきる中、賢治の立札が目に入る。旅は明治から昭和初期の文学へと移る。大胆な想像画から、歌曲の作曲もしたいう楽器セロがあり、又小さな手帳が展示され、「雨ニモマケズ…」が11月3日（昭和6年）の日付で記入されていた。病床でのひそかな悲願自戒の記録で死後発見されたとある。賢治の情熱的なあまりにも短い37年の生涯が、なぜか悲しく残るのでした。

夕闇せまる頃今宵の宿花巻紅葉館に到着し、浴衣に着かえ宴会場へ。団長の佐藤先生がアメニモマケズ皆元気で一日目を終ることができたと御挨拶。地元吟友の方からの地酒〝雪っこ〟をいただきながら、郷土芸能〝鹿踊り〟又、吟友の多彩な芸を堪能し、やがて終宴。大風呂で疲れをとり、明日のコースを楽しみに眠りについた。

（二日目）　　白井麗岳

前日雨にたたられたので、起床早々空を見る。少し陽ざしが見えてほっとする。バスは8時に出発し、30分ほどで林檎園に着く。一人一個づつということで、みんなで大きいのを選ぶ。揃って宅配を依頼し、手持ちの林檎の香りを乗せたバスは渋民村に向って高速を走り、左右に広がる田園風景は、不作のまま刈り残され痛々しい。ガイドさんの説明に目を向けると、左手前方に岩手山の姿が現われた頃、左手の山並の紅葉は紬の着物にでもし

たいような色模様。

北上川を渡ると渋民村の石川啄木記念館前に到着。岩手吟詠会の先生方に迎えられ記念館を見学。間借生活をした頃のゆかりの斉藤家と、小学校をみて、記念碑の前で岩手吟詠会の山田先生に「柳あをめる」を朗詠していただき、つづいて草野先生の先導で全員合吟。

バスはまた高速を北上山脈を真正面にして進み、黄色の唐松林から白樺林へと景色が変り、放牧ののんびりした様子などを眺めながら盛岡市内に入る。ここでは南部鉄の作業所と販売店を通り抜け、お楽しみの〝わんこそば〟の昼食。賞品が出るというので、マッチ棒を数えながら挑戦、最高は120杯とか。

お腹いっぱいになり、ガイドさんの説明を子守唄に聞きながら、ひと山越えて龍泉洞に。ここで澄んだエメラルド色の名水をいただく。

あいにく降り出した雨の中を、バスは一路今夜の宿に向って走る。山を下って北陸海岸近くなるにつれ、車窓からみる切り立った岩肌の紅葉はまさに一幅の絵の如く、その鮮やかな美しさは実にすばらしい。暮れかかった海に浮かぶいかとりの漁火をみながら宿に着く。明朝6時頃に海から昇る素敵な日の出をしっかり見ておきたいと思いながら、まずは四人部屋に落ち付き、一服のお茶のなんと美味しかったこと。

（三日目）　　村田　瀞　岳

窓をあけると昨日の雨は上り、水平線の彼方に美しい太陽が昇り始め、思わず「日は浪より昇りて…」と口ずさむ。バスに乗り込み、北上山脈を横断するシーサイドラインの両側の山々は、美しい秋の色に染められ、目をみはる思いで紅葉を満喫しながら田老町に着く。

遊覧船に乗り、陸中海岸のダイナミックな断崖が続く自然の景観をながめながら、白黒のツートンカラーの羽根を広げて群がってくる海猫が、船客のなげる餌を、空中で上手にキャッチする愛らしさに、みんな子供にかえって笑い声があちこちで聞え、楽しく過している中に、霊鏡和尚がさながら浄土の様だと、感嘆して名づけられた名勝浄土ケ浜に着き船から降りる。ここでバスの号車別に記念撮影におさまる。

再びバスで宮古に向う。宮古は日本本州最東端の地で、漁港は活気があり、度々の津波の災害にそなえ、日本一の防災壁が出来ていました。昼食の時、宮古吟詠会の役員の方達のお出迎えを受け、食事を共にして、お互いに吟道発展の為にがんばりましょうと話しあいました。

バスが盛岡に向う山々はもう冬仕度で落葉しはじめていました。東京駅に、岩手吟詠会会長佐々木岳中先生他役員の方がわざわざお見送り下さり、吟交を深め、楽しい二泊三日の旅を終え、新幹線で帰路に着きました。

葉山町文化祭　詩吟詩舞の会

10月24日第27回右会が葉山町文化会館大ホールで行なわれました。お天気にも恵まれ、今年は例年に比べ詩舞の題数が多く、目と耳を楽しませてくれ、無事に終りました。

逗子市文化祭　詩吟詩舞発表会

逗子B・磯　村　朋　岳

11月7日第43回逗子市文化祭の一環である〝詩吟詩舞発表大会〟が、逗子図書館ホールで開催されました。今回初めて、逗子市と姉妹都市である伊香保から、伊香保文化協会の詩吟・舞の方々をお招きして、いつもより盛大にひらかれました。当日入口には花輪が出

され、天気もまずまずで、座席も早くから埋まり、ホールの中は、人の熱気で暑い位でした。

吟詠一部も順調に進み、11時頃伊香保の方達も着き、益々盛り上がりました。

プログラムも立体吟、式典と進み、詩舞第一部では、小学生の詩舞が大変立派で可愛らしく、つい目を細め、拍手にも力が入りました。反面大人は、間違えたり、絶句したり、ちょっと不甲斐なく思いました。

いよいよ吟詠第二部。私達逗子Bは合吟で、「九月十三夜」。当日一度合わせたものの、出番が近づくと胸がドキドキして不安でしたが、一声発した途端落ちつきました。舞台裏で「よく合っていたわね、ああ、ホッとしたわ」と、口々に甘い批評を言いあっている皆の顔は、緊張も解けてにこやかでした。

私は詩舞にも出たので、落ちついて聴くことができませんでしたが、他流派の人とのコミニュケイションも図れ、先生方のさすがの吟も聴くことができて、大変有意義な一日でした。

秋期の吟舞連も、伊香保の方達を大きな拍手で送り出して、時間通り無事終了しました。

夫婦箴

方　正学

夫以義為良　婦以順為令
和睦禎祥来　乗戻災禍応
挙案必斉眉　如賓互相敬
牝鶏一晨鳴　三綱何由正

（読み方）

夫婦の箴

夫は義を以て良と為し
婦は順を以て令と為せ
和睦すれば禎祥来たり
乗戻すれば災禍応ず
案を挙げては必ず斉眉し
賓の如くに互に相い敬せよ
牝鶏一たび晨に鳴けば
三綱何ぞ正しきに由らんや

（語　釈）

義（礼にかなった正しい行い、人としてふみ行うべき道）・順（すなお・したがう）
禎祥（めでたいしるし）・乗戻（しっくりしない）・案を挙げては必ず斉眉し（挙案斉眉…梁鴻(夫)孟光(妻)の故事、夫婦が互に敬し合うのを賞める言葉。後漢の梁鴻は貧乏であったが、妻は常にお膳を眉まであげて差し出した故事）・牝鶏一たび晨に鳴けば（牝鶏晨鳴主不栄…牝鳥が時を告げる家の主人は栄えない）・三綱（君臣、父子、夫婦間の道）

※前記は十月号に記載の「方正学夫婦の箴」の詩文です。故松井岳洋先生がすばらしい隷書体で書かれた扁額をもとに、宇都宮先生が詩文を研究解読したものです。

（入　会）

692 大井きよ子　逗子市池子二―二六―六
（銀　詠）☎〇四六八―七一―一四四五
693 平井喜美子　逗子市池子二―二六―四
（銀　詠）☎〇四六八―七一―一五一六

（退　会）

44 伊藤峰岳（上　原）
77 飯田愛岳（諏　訪）
112 伊藤朗岳（上　原）
115 大久保元風（銀詠）
236 相多秀風（上　原）
237 相多芳風（上　原）
238 鈴木英風（上　原）
240 行谷利風（上　原）
243 津久井好風（上原）
263 新倉春風（上　原）
265 大坪功風（上　原）
266 大坪孝風（上　原）
327 関井倫風（上　原）
545 竹下友泉（上　原）
576 小高サダ（山ノ根）
622 天野俊子（銀　詠）